



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第93回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えします。

2018年まとめ ① 捕手編 「試合終了まであきらめないプレイを！」

秋季兵庫県大会でのことです。9回裏、同点の場面で2死走者1塁。打球は左中間を抜け、打球を懸命に追った左翼手は1塁走者をアウトにしようと中継の遊撃手に送球。捕球した遊撃手は、すかさず本塁へ大遠投しましたが、1塁走者が本塁へ駆け抜けるのが一瞬早く、サヨナラ! **ところが・・・**
捕手は、勝負を決したと思ったのか、遊撃手からの送球を捕球せず、スルーしました。このプレイどう思いますか? ルールとマナーの側面から考えてみましょう(秋季近畿大会においても同様のケースがありました)。

(A) ルールの視点

サヨナラの走者が本塁に達していたとしても、もし、打者走者が、勝負を決したと思い、①1塁ベースに到達せず(触塁せず)本塁の方へ戻ってきたり、②1塁ベースを空過したりしていればどうでしょう。

捕手は、1塁へ送球し1塁手が1塁ベース上でアピールすれば、打者走者はアウトになります(加えて、③1塁走者の2塁、3塁、本塁の触塁の確認をすることも大切です)。もし、1塁走者が本塁まで正しく触塁していたとしても、第3アウトの成立が、打者走者が1塁に触れる前のアウトになった場合、サヨナラの得点は記録されず、延長戦に入ることになるのです。(規則5.08(a)【例外】(1))

今回のケースでは、捕手は、上記の①から③のようなプレイの「最後の確認」を怠っていました。アマチュア野球においては、試合終了時におけるアピール権の消滅について、両チームが本塁に整列したときと定められていますので、捕手がプレイの最後の確認をしなかったことは、とても残念な出来事でした。(規則5.09(c)(4)【注3】)



(B) マナーの視点

捕手は、遊撃手からの送球を捕球したとしても、タッグ(触球)は間に合わないと判断し、あきらめた気持ちも重なって捕球しなかったのだと思います。しかしながら、仲間の野手は、アウトにしようと懸命に中継でボールをつなぎ、本塁へ渾身の送球をしました。その気持ちの入ったボールを捕手には、最後までしっかりと受け止めてほしかったと思います。もし、捕球していたとしてもアウトにすることができなかったかもしれませんが、仲間とのキャッチボール(=心)は、つなげてほしかったと感じるプレイでした。

また、視点を変えてみると、野球の道具の一つであるボールを大切にするという基本的な考え方にも通じるところがあるのではないのでしょうか。高校野球は、教育の一環として野球というスポーツを通じて高校生の人間形成を行っています。試合終了時、両チームが整列してあいさつするまで、相手チームへのリスペクト(尊敬)の気持ちを忘れず、行動してほしいものです。



今回は、「捕手」を視点に事例を紹介しましたが、日本高野連・審判規則委員会が作成した「平成30年度重点指導事項及び周知徹底事項」の中においても、捕手の動きについて掲載されていますので、この機会に確認しておきましょう。

① 「正しい捕球を心掛ける」

マナーとして投球を受けた捕手が“ボール”をストライクに見せようとする意図でキャッチャーミットを動かしたり、球審のコールを待たずに自分でストライクと判断して次の行動に移ろうとしたり、球審の“ボール”の宣告にあたかも不満を示すようにしばらくミットをその場におくような行為は止めましょう。

② 「正しい捕手の位置を理解する」(規則 定義17 5.02(a) 6.02(a)(12))

捕手はホームプレートの直後に位置しなければなりません。キャッチャースボックスから足を出さないように。

③ 「投球を逸した捕手は敏速にその球を自分で処理する」

投球を後逸してしまった場合は、素早く自分でその球を取りに行くように努めましょう。